

あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第107回

シビックテックとアクセシビリティ

●一般社団法人Code for Nerima

青木 秀仁(あおき ひでひと) [Facebook](https://www.facebook.com/code4nerima/)

最近、「アクセシビリティ」という言葉が各方面で使われ始めました。日本では「バリアフリー」と同じ障害者対応という意味で使われることが多かったり、自治体でも障害・福祉関係の部署が担当していたりしますが、それにはちょっと違和感を覚えます。アクセシビリティとは、文字どおりあらゆることへの「アクセスのしやすさ」を考えていくことだと筆者は思っています。

本稿では、一般社団法人Code for Nerimaが注力しているアクセシビリティのさまざまな取り組みを紹介します。

誰もが参加できる活動を目指して

筆者はCode for Nerimaの代表理事を務めています。Code for と言うとオープンデータやOSSの取り組みがイメージされますが、Code for Nerimaは練馬区のいち地域団体として、ほかの地域団体と一緒

に活動しています。もちろん、コンセプトはITを活用した地域課題の解決ですが、練馬区が主催するイベントに参加したり、他団体のサポートを行ったりもしています。東京都練馬区が地域団体との協働に力を入れていることもあり、区の協働推進課と組んで活動を行っています(写真1)。

こうした地域団体の活動は「全員参加」が重要だと考えています。言い換えると、誰でも参加できるということです。もちろん、障害がある方や外国人が多く住む地域にお住まいの方も当てはまります。障害者対応や外国人次対応は十分でないケースが多く(もちろんきちんと対応していることはたくさんありますが)、そうした方たちのほうが生活に対する課題は多いのではないかと思います。

そうした課題を持っている方たちにも気軽に参加してもらえよう、Code for Nerimaはイベントでの情報アクセシビリティに取り組んでいます。

ツールの活用で全員参加を目指す

筆者はもう1つ、アプリ「UDトーク」^{注1}の開発者という肩書きも持っています。UDトークとは、音声認識や自動翻訳でリアルタイム字幕を提供できるアプリです。このアプリの開発をきっかけに耳が聴こえない方たちとの関わりも長く続いており、筆者が登壇する際には必ずこのUDトークで字幕の提供を行っています。

▼写真1 2020年2月の「練馬つながるフェスタ」にて行ったステージパフォーマンスの字幕サポート



注1 <https://udtalk.jp>

シビックテックとアクセシビリティ

そうした経緯もあって、Code for Nerimaのすべてのイベントはリアルタイム字幕を付けて開催しています(写真2)。聴覚障害のあるメンバーが何人かいるというもありますし、聴こえる立場であってもリアルタイム字幕は講演の内容を理解する手助けになります。

また、その音声認識をした結果を手直しして、全文記録をFacebookグループの投稿として残すこともしています。テキストという形で残しておく、視覚障害のある方がスクリーンリーダー^{注2}を使って読み上げを聴いたり、点字を使って読んだりすることもできます。

最近ではZoomを使ったオンライン形式のイベントが流行っていますが、Code for Nerimaは2年前からZoomを導入し、字幕付きの動画配信を行っていました(写真3)。オンラインでの開催は、それ自体が、会場に直接来られない方にとってのアクセシビリティとなります。全員参加をこうしたテクノロジーの活用で支えるのも、シビックテックの活動の1つではないかと考えています。

練馬区との取り組み

練馬区の地域団体として、練馬区のイベントをサポートする活動も行っています。本年度から「つながるカレッジ^{注3}」という練馬区の協働推進課が主催する学習プログラムが始まりました。昨年までは「パワーアップカレッジねりま」という名称で福祉の分野で開催していたものがグレードアップして、「福祉」「防災」「農」「みどり」「環境」の5つの学習分野でリニューアルされました。

しかし今年はコロナ禍で開催ができず、開校が遅れていました。講義は9月に入ってから始まったのですが、区の方から「オンラインとオフラインの両方で

提供したいので、力を貸してほしい」との依頼があり、Code for Nerimaで開催のお手伝いをしています(写真4)。区としても区民の方にはいろんな形で参加をしてもらえるようにしたいとのことです。

Zoomを使用するための機材や設置はほとんど区のほうで行っていただき、Code for Nerimaでは全

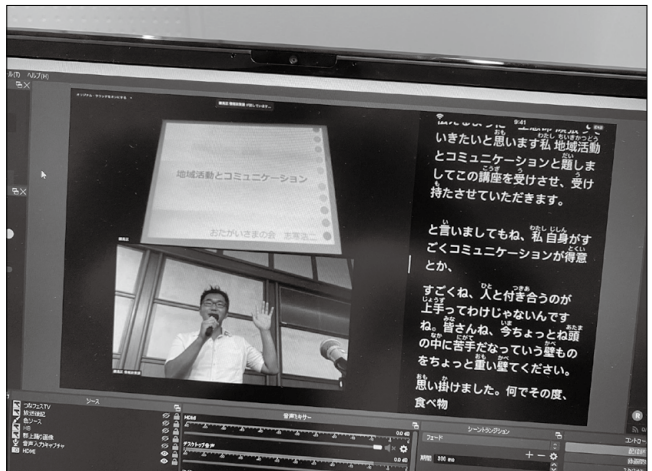
▼写真2 Code for Nerima 定例ミーティングの様子



▼写真3 Code for Nerima オンライン定例ミーティングの様子



▼写真4 「つながるカレッジねりま」公開講座をオンライン・オフラインの両面でサポート(画面右の字幕はUDトークによるもの)



注2 視覚に障害がある方が読み上げでパソコンやスマホを使用するためのソフトウェア。

注3 <https://www.city.nerima.tokyo.jp/kurashi/kuseisanka/kyodosuisin/tsunagaru.html>

体のチェックとYouTubeへの配信、UDトークの誤認識の訂正などを行いました^{注4}(写真4)。練馬区では区内の各公共施設で、職員が業務やイベントで使うWi-FiやiPadなどの機材が豊富に用意されています。

つながるカレッジの受講をオンラインで希望された方には、資料を印刷して自宅に送付します(PDFで見ることできます)。オンラインで開催することで現地に來るのが難しい人も参加でき、事前に資料をデータで配布することで視覚障害がある方も内容を把握しやすく、かつ字幕があることで耳が聴こえにくい方(これは障害がある方だけに限りません)も理解しやすくなります。

もしかすると受講者にそういったサポートが必要な方はとくにいないかもしれませんが、区が提供するイベントとしてこういう対応に普段から取り組んでおくことで、サポートが必要な方にいつでも参加していただけるようになります。

これからの共生社会を考えるうえでまずは、こういうイベントを通じてITを活用したアクセシビリティに取り組んでいくことが大切だと思います。

注4 詳しくはこちらの記事をご覧ください。

<https://note.com/code4nerima/n/n28787072551b>

イベントでリアルタイム字幕を設置

Code for Nerimaは2018年3月に設立し、Code for Japanのブリゲードとして登録されました。さっそくその年に、新潟で開催されるCode for Japan Summit 2018に参加することになりましたが、そこで「聴覚と言語アクセシビリティ対応としてすべてのセッションにリアルタイム字幕を付けませんか?」と提案したら、快く提案を受け入れていただけました。そして、Code for NerimaでUDトークを使って多言語リアルタイム字幕を提供するサポートを行うことになりました。最近では、Code for Japanの企画するほぼすべてのイベントでリアルタイム字幕のサポートを行っています。

また、ちょうどその年は基調講演に海外ゲストを迎え、台湾のg0v(ガブゼロ)からのグループ参加もありましたので、言語アクセシビリティに取り組むことの意義を確認できた気がしました。翌年に千葉の幕張で開催されたCode for Japan Summit 2019でも、すべてのセッションに字幕を付けることができました(写真5)。

これらのサミットのホームページには「アクセシビリティ」として字幕の対応があること、必要なサ

▼写真5 Code for Japan Summit 2019にて、UDトークによるリアルタイム字幕つきでの講演



ポートがあれば申し出ていただくことを明記しています。こうしたアクセシビリティのガイドラインは海外のイベントでは多く見られるのですが、日本のイベントでは明記されてあることが少なく、そうした聴覚や言語のサポートがあるかどうかは問い合わせるのが通例です。しかし冒頭でも述べたようにアクセシビリティは能動的なアクションです。こちらから提供できることを提案するだけでなく、逆に提供してほしいことを聞いて「対話」することで最適解を見つけていくことが大事だと考えています。

想像力と経験

筆者は、アクセシビリティについて考えるときは「想像力と経験」が大事であると常々主張しています。もし明日耳が聴こえなくなってもすぐに手話ができるようになるわけでもなく、目が見えなくなっても、急に点字が読めるようになるわけではありません。

- もし自分の耳が聴こえなかったら
- もし自分の目が見えなかったら
- もし自分が車椅子に乗っていたら
- もし自分が日本語がわからなかったら

このような状況に置かれたとき、今の生活やエン

▼写真6 2019年10月の練馬産業見本市にブース出展したときの写真



ジニアとしての開発、シビックテック活動などが継続できるでしょうか？ もしこれが想像できれば、そういう人が参加したいと思ったときにどう感じるのかを考えられると思います。また、自分では言わないけれど、アクセシビリティのない状態でイベントに参加しているかもしれないという可能性も想定できると思います。

筆者がUDトークを開発したきっかけは、とある聴覚障害者の方との出会いで、筆者にとってはその人が人生で初めて会った耳が聴こえない人でした。そこから耳が聴こえない方とたくさん知り合いになりましたが、気がつかなかっただけでその人たちはずっと前から筆者の周りにいたのです。そのくらい聴覚障害者という存在への認識がなかったのです。

アクセシビリティに取り組んでいく中で、目が見えない方とも知り合うこともできました。そうした方たちと一緒に活動をしていくにはどうしたらいいだろう、ということは1人で考えていてもわかりません。活動に参加してもらい、一緒に考えることで「こういうところがわかりにくい」とか「こうすれば伝わる」などの声を経験とし、学びに変えることができるのです。

生活の選択肢を増やすために

シビックテックとは何ですか？と聞かれたとき、Code for Nerimaとしては「ITを活用して地域の課題に取り組むこと」と答えています。テクノロジーには今までできなかったことや難しかったことを実現する力があります。とくにそれはコミュニケーションやアクセシビリティの分野において活用できると考えています。

社会課題としてさまざまな分野のアクセシビリティに取り組むということは生活の選択肢を増やすことであり、諦めない社会を作ることでもあると思います。まずはCode for Nerimaという小さい地域団体からアクセシビリティに取り組み、「全員参加」を継続していきたいと思います(写真6)。そしてほかの団体にこうした活動の方法などをシェアしていけたらいいなとも考えています。SD